

構造化と合科学習

— 初めて支援学級を担当して —

東大阪市立孔舎衛小学校 鈴木元美

1. はじめに

初めて支援学級の担任となり、試行錯誤しながら子ども達と取り組んだ1年間。子ども1人ひとりについて知ることから始め、3つの構造化（時間の構造化、空間の構造化、方法の構造化）と合科学習を中心に取り組んだ。その成果と課題を考察する。

2. 児童の実態

本校の支援学級は知的障害学級1クラス、自閉症・情緒障害学級2クラスの3クラスで、17名の子ども達が在籍している。全ての学年に支援学級の児童がいる。子ども達は身辺自立ができる子が殆どであるが、着替えやトイレの際など、支援を必要とする子もいる。主に言葉でのコミュニケーションが取れているが課題のある子もいる。

また、昨年まで支援学級を担当されていた先生方が全員転勤となり、今年度は担任3名、全てが変わった。学年が上がり、通常学級での担任も変わっており、環境の変化に不安を感じる子が多くいた。そのため4月当初は、まず子ども達を知ることから始めた。

3. 取り組みにあたって

子ども達について分からないことや、困っていることなどは、積極的に保護者の方に相談する中で、「門眞一郎先生の自閉症スペクトラム講座」を紹介していただき、一緒に参加させていただくことになった。その講座の中で、自閉症のことや、具体的な支援の手立てについて教えていただいた。そして、「これは支援学級の取り組みでも活用できる。」と強く感じたことを実践することにした。

4. 構造化について

(1) 時間の構造化

「時間の構造化」としてスケジュールの活用に取り組んだ。これは昨年度以前から行っていたので個々に合ったものを引き続き活用した。スケジュールを活用することで1日や1時間の流れを把握でき、スムーズに行動することができた。

<事例1>

5年生のA君は毎朝、通常学級に行くとき担任の先生に今日の予定を確認し、自分でスケジュール表に書いて予定を把握している。(図1) また11月からは、保護者との相談の上で、1時間のスケジュール(図2)も活用した。1時間の授業の中で、何をするのかをス

スケジュール化し、ホワイトボードに課題を文や絵で順番に示し、やり終えた項目を自分で消していく方法を取り入れた。課題に対して、終わったものを自分で消していくことで達成感を得られるようにした。また急なスケジュールの変更などの場合にも、ホワイトボードなら簡単に訂正することができ、視覚から入る情報によって、変更を受け入れやすくなった。

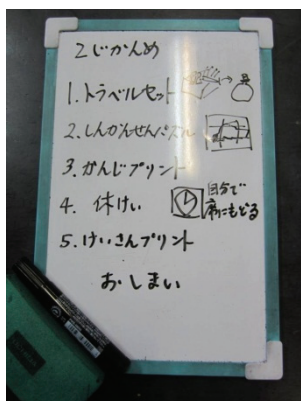


図1 1日のスケジュール

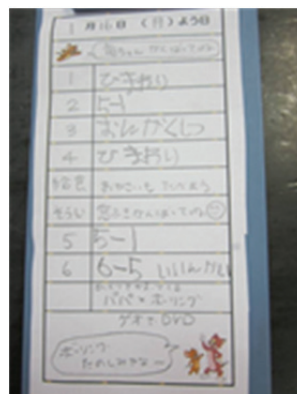


図2 1時間のスケジュール

(2) 空間の構造化

本校の支援学級は3クラスあり、ひまわり教室・あさがお教室・たんぼぼ教室という。主に学習や活動をする教室はひまわり教室で、そこに何人もの子ども達が集まって取り組む寺子屋式で取り組んでいた。(図3)しかし、聴覚過敏の子や、周りに友達がいるとついつい喋ってしまう子、1度休憩するとなかなか切り替えられず、学習が進まない子など、1度に大勢が集まると集中して学習に取り組むことが大変難しい状態であった。そこで、1人1人が落ち着いて学習できるには、教室環境をどうしたらいいだろうかと考え、「教室大改造」と称して、3つの教室に個別のブースを作ることにした。(図4)このブースの作り方は夏休みに見学させていただいた『発達しょう害支援センターPAL』での取り組みを参考にさせていただいた。左の棚から課題を取って右のおしまいボックスに片付けるという作業の流れをつくり、課題がはっきり分かるように、100均のかごを使って①～④までの番号をつけた。番号のついた箱を使うことで作業の順番が明確になり、自分から課題に取りかかることができるようになった。そして、課題をいくつやれば終わりかが明確になったことで、学習に対して意欲的に取り組めるようになった。



図3 変更前の学習スペース



図4 個別の学習スペース

<事例2>

B君は4年生の男の子で、聴覚過敏があり、大きな音が苦手なため、日頃からイヤマフをつけて過ごしている。4月当初は他の子ども達と一緒に集団で学習していたが、いざ学習を始めると、椅子に座るのに一苦労し、課題が1つ終わるごとに教室を飛び出し、その度に連れ戻すといった状況の繰り返しであった。その原因として視覚過敏と聴覚過敏があり、集団で活動することが苦手であることが考えられた。

そこで個別のブースを使い、静かな環境で学習するようにした。課題は無理がないようなものに設定し、その中でも少しずつ変化を加えていった。1人でできる課題と、教師の支援によってできる課題を用意し、学習の最後に自立課題を導入した。その結果、声をかけなくても自分で学習に取り組めるようになり、教室からも出ていかなくなった。静かで落ち着いた環境であること、課題が明確であること、できることに自信を持たせることで、課題にしっかりと取り組めるようになったのだ。子どもの実態に合わせ学習環境を整えることの大切さを強く実感した瞬間であった。

(3) 方法の構造化

3つ目の構造化として「方法の構造化」に取り組んだ。ここではNPOピュア自閉症連続講座の門先生の講座の中で「自閉症の子ども達はパソコンが好きである。自分の操作で決まった答えが毎日同じように示されるからである。」ということをもとに、パソコンのパワーポイントを使って取り組んだ。パワーポイントの利点は自分でパソコンを操作して、何度でも自分のペースで確認できることであると考えられる。

<事例3>

・わくわく遠足マニュアル(資料1)

本校の4年生には3人の支援学級の児童がおり、遠足でぶどう狩りに行く際の事前説明に活用した。学校を出発し、駅までの道のりや電車の乗り換え、ブドウ園の様子などを写

真と言葉で分かりやすく説明した。視覚的にイメージがしやすいため、見通しを持って遠足に臨めた。また当日は持ち運びができるスケジュールを持って遠足に参加し、友達と一緒に楽しい思い出作りができた。

<事例4>

・すいすいお掃除マニュアル（資料2）

遠足のマニュアルの成功を受け、掃除マニュアルを制作した。A君は教室での掃除が苦手で、「いや。」というメッセージを多発していた。「いや。」というのは「何をしたいか分からないからではないか。」との保護者からの申し出があり、それを受けて手順を示したお掃除マニュアルを作った。マニュアルでは、机運びと窓拭きの仕方をパワーポイントで制作した。保護者と相談し、データはコピーして家庭でも操作できるようにした。

その結果、掃除時間に手持無沙汰になることは少なくなった。まだ1人で最初から最後まで掃除ができるわけではないが、自分がやるべきことが明確になったことで、以前より本人の不安がなくなったようである。

5. 合科学習の取り組み

（1）目的

合科学習の目的として、以下の4つのことを掲げた。

- ・集団作り
- ・リーダーを育てる
- ・友達と取り組む喜びや成功体験を味わう
- ・友達の良さを認め合う

（2）具体的な取り組み

<スイートポテト作り>（資料3）

支援学級の畑に植えたサツマイモを使ってスイートポテト作りを行った。見通しを持たせるために、パワーポイントを使って、当日の流れ（作り方）を見せておいた。作り方については、通常のスイートポテトの作り方では、作業が難しいと考えビニール袋に材料を入れ、混ぜて、丸める方法で作ることにした。

実習当日は朝一番に「今日は、おいもやんな。楽しみ。」と言ってくれる子もおり、意欲的な姿が多く見られました。触覚過敏や嗅覚過敏の児童については保護者と相談しながら、少しでも参加できる方法がないか考え、オープンスイッチを押すという役割をしてもらうことにした。

作業は、すぐにできる子もいれば、袋に入れた材料を上手に揉み潰すことが困難な子も

おり、様々であった。しかし、どの子ども楽しく取り組むことができ、自分で調理する喜びを感じてくれたと思う。今まで食わず嫌いでサツマイモが食べられなかった子が、「美味しい！」と言って食べてくれたことが1番の成果であった。保護者からも『「食べること」は生きていく上で最も大切なことなので、こういった経験を増やしていただくと嬉しいです。』と嬉しい一言をいただいた。

<壁画作り>

1ヶ月に1回程度季節に合わせた壁画作りをしている。支援学級の前の廊下に飾っており「〇〇君の作ったのはどれかな?」「上手だね。」など支援学級前の廊下を通る子ども達と支援学級の子ども達を繋ぐ役割も果たしている。

<集団ゲーム>

ハンカチ落としやボール回しなどの集団ゲームを取り入れ、ルールを守って楽しむ練習をしている。また、跳び箱や棒渡りなどを取り入れたサーキット運動も行った。集団ゲームの中で少しずつ、協力する姿や、上級生が下級生を手伝ってあげる姿が見られるようになってきた。しかし順番を守ることや静かに待つことにはまだまだ課題が多い。

<お楽しみ会の練習>

支援研のお楽しみ会が近づくと、合科学習でもお楽しみ会の練習に取り組んだ。集団行動が苦手なB君がみんなと一緒に参加できることを中心に考え取り組んだ。個別練習から始め、簡単な動きから繰り返し練習した。少しずつ集団での練習に参加できるようになり、本番は曲の最初から自分のポジションに立ち、隊形移動して、ポーズを決めることができ、大きな成功体験を味わえた。

(3) 成果

1つは「リーダー意識の芽生え」が見られるようになったことである。高学年の子が下の学年の子を助けてあげられる姿が見られるようになった。また、お楽しみ会のダンスでの隊形移動においても「僕に任せて!」と率先してリーダーシップを発揮してくれる姿も見られた。また集団ゲームの際には上級生が率先して司会をすることができた。

2つ目は集団としてのまとまりが見られるようになったことである。席について話を聞く、ゲームのルールを守るなど基本的なことが少しずつだが、守れるようになった。様々な活動を通して、支援学級が1つの学級としてまとまってきたように感じる。

(4) 課題

1つ1つの合科学習に繋がりがなく、単発で終わってしまうことが多々あった。また1人1人の児童に対して、目標が十分定まっておらず、学習の中でどんな力をつけたいかが

明確ではなかった。来年度は4月から1年間の計画をしっかり立てて個別の指導計画に基づいて、個々の目標と学級としての目標を定めて、取り組んでいかなければならない。

6. 終わりに

今年度は何もかもが初めての経験で、試行錯誤の日々であった。分からないことばかりでうまくいかないことの方が遥かに多く、悩み苦しんだ1年であった。しかし、じっくり1人1人の子ども達と向き合うことができ、小さなステップだったが、成長や喜びを一緒に感じる事ができた。そして様々な手立てを考えることで、子どもの力をどんどん引き出すことができることがわかった1年だった。今年度の経験を生かし、来年度以降はより計画性、系統性を持った取り組みをしていきたいと考えている。そして1年間を通してどんな子ども達を育てたいかという明確なビジョンを持ち、目標を持って取り組むようにした。学級としては、引き続き、個々を大切にしながら、集団としてのまとまりを作っていきたい。